



立入が丘小学校だより



締めくくりの3月

つい、この間お正月を迎えたと思ったら、早いもので、もう3月になりました。3学期も最後の月です。先月の学校だよりを書いたように、まさに「1月は往ぬる 2月は逃げる 3月は去る」の感覚です。6年生の教室には卒業までのカウントダウンカレンダーが張られていますが、登校日は、すでに残り二週間ほどになっています。

2月は4年に1度の冬のスポーツの祭典「ミラノ・コルティナオリンピック」が開催されました。日本は、冬季五輪過去最多の24個のメダルを獲得しました。冬季五輪の通算獲得メダル数が100個で、約4分の1を今大会で獲得したことになります。選手たちを見ていると、緊張や重圧、プレッシャーは当然あると思うのですが、「チームジャパン」としてのまとまりがあり、競技を明るく前向きに楽しんでいる様子が多くの場面で見られました。フィギアスケートのペア出場の三浦璃来・木原龍一選手やスノーボードハーフパイプの平野歩夢選手の「あきらめない気持ち」も、見ている人の心に残る感動がありました。特に平野選手は、オリンピックの20日前の競技中に転倒し、複数箇所を骨折するというけがを負ったにもかかわらず、オリンピックに出場して7位入賞を果たしました。オリンピック後のご本人の振り返りの中では、けがをした時には、オリンピック前にここまでの怪我をしたことがなかったそうですが、オリンピック出場を辞退することは頭になく、「ここでさらに試練を与えられた」「これをいい経験と捉え、自分のストーリーとしていい方向へドラマを作りたい」と考えたそうです。こう考えないとポジティブでいられなくなると、気持ちを振り絞っていたとのこと。そして、人が経験できない事を経験させてもらっているという感覚で自分を維持していたと話されていました。本番に向けては、自分にできることを一つずつ行い、チャレンジ精神をしっかりと持って日々過ごしたそうです。

平野選手の話に出てくる「あきらめない気持ち」「試練に向き合う」「できることを一つずつ」「旺盛なチャレンジ精神」は、私たちにも当てはめられることだと思います。自分の人生の歩みの中に、取り入れたい考え方だと思います。

今、学校では、「卒業」へ向けての取り組みが進んでいます。卒業する6年生、その6年生を送り出す在校生がともに感謝の気持ちをもって活動をしています。特に、卒業プロジェクトとして卒業へ向けて様々な活動を展開している6年生と、6年生を送る会の企画・運営をする次期リーダーの5年生は、責任感強く、よいものを創り上げようという気持ちが全員から感じられます。「チームジャパン」ならぬ「チーム6年生」「チーム5年生」です。こうやって伝統が受け継がれ、卒業式当日には「チーム立小」となって一体感を醸し出すことと思います。1年間のゴールに向かってみんなで協力して進んでいく1年生から6年生全員を、眩しく見つめていきたいと思っています。

